



|                        |  |
|------------------------|--|
| Title                  | Revision of Motherhood : Virginia Woolf's Creative Reproduction in Life and Art [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review] |
| Author(s)              | 金井, 彩香   |
| Citation               | 北海道大学. 博士(文学) 甲第11062号   |
| Issue Date             | 2013-09-25   |
| Doc URL                | <a href="http://hdl.handle.net/2115/53788">http://hdl.handle.net/2115/53788</a>  |
| Rights(URL)            | <a href="http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>                            |
| Type                   | theses (doctoral - abstract and summary of review)   |
| Additional Information | There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.   |
| File Information       | Saika_kanai_review.pdf (「審査の要旨」)   |



[Instructions for use](#)

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：金井彩香

審査委員  
主査 教授 瀬名波 栄 潤  
副査 准教授 竹内 康 浩  
副査 教授 高橋 英 光

## 学位論文題名

Revision of Motherhood: Virginia Woolf's Creative Reproduction in Life and Art

(母性に応じて：ヴァージニア・ウルフの自己再生と小説)

審査経緯は以下のとおりである。

|                  |            |                      |
|------------------|------------|----------------------|
| 平成 25 年 6 月 7 日  | 審査委員会発足    |                      |
| 平成 25 年 6 月 10 日 | 第 1 回審査委員会 | 論文の配付と審査日程の調整        |
| 平成 25 年 6 月 14 日 | 第 2 回審査委員会 | 論文内容の検討と問題点の整理       |
| 平成 25 年 6 月 21 日 | 口頭試問の実施    |                      |
| 平成 25 年 6 月 21 日 | 第 3 回審査委員会 | 口頭試問の内容検討と評価、学位授与の判定 |
| 平成 25 年 7 月 1 日  | 第 4 回審査委員会 | 審査結果報告書（案）の検討と確認（1）  |
| 平成 25 年 7 月 8 日  | 第 5 回審査委員会 | 審査結果報告書（案）の検討と確認（2）  |
| 平成 25 年 7 月 9 日  | 第 6 回審査委員会 | 審査結果報告書の確定           |

## 審査要旨

本論文は、20 世紀イギリス人作家ヴァージニア・ウルフの「子供の不在」に焦点を当て、ヴィクトリア朝的父権社会イデオロギーの中で、それによる不安・抵抗・克服の過程を「外傷後成長」(Posttraumatic Growth, PTG) の理論によって説明し、作家の小説を自伝的に読み直し、フェミニスト作家ウルフを「母性にあらがう」作家として再解釈する試みである。

論文は、5 章構成である。まず、前提として、R. G. テデスキ等による PTG 理論の概要について 1996 年・2004 年の論文に基づいて説明されている。加えて、「子供を望むこと」の概念を、アドリエヌ・リッチ、シモーヌ・ド・ボーヴォワール等複数の思想家を網羅し多角的に考察している。

それらをふまえ、まず第 1 章では、20 世紀初頭イギリスにおける、子供を持つことに関して女性がおかれた状況を社会的・医学的側面から考察し、社会の母性への求めと、母性を維持する医療の未熟さの不均衡を明らかにしている。

第 2 章では、ウルフの精神形成における母を中心としたヴィクトリア朝思想の影響をふまえ、日記・手紙・伝記等の資料の詳細に検討し、初期作品『船出』(1915)、『夜と昼』(1919) におけるウルフの女性性、とりわけ母性への意識の投影を考察している。

第 3 章では、1910 年代末からのウルフの文学的・精神的生活の成長変化をふまえ、それに呼応する『ジェイコブの部屋』(1922) および『ダロウェイ夫人』(1925) における技巧的成熟を精査。また、正気／狂気といった既存の概念を再構築することにより、ヴィクトリア朝的母性イデオロギーへの疑問・抵抗・克服への試みを確認している。

第 4 章では、『ダロウェイ夫人』と『燈台へ』(1927) を取り上げ、1920 年代のウルフの同性愛関係に着目する。異性愛イデオロギーからの離脱は、父権性社会と母性性社会からの解放の過程であるとし、登場人物はウルフの多面的な精神を投影させるものとして読み解いている。

第5章では、保護者的存在であった恋人との別離と生殖能力の喪失の意識によってもたらされる、ヴィクトリア朝的イデオロギーと性の概念からの解放の意識を、『オーランドー』（1928）における両性具有の概念のなかに、また、『波』（1931）は6名の登場人物の語りがウルフ自身の「意識の流れ」による自伝的語りであるとし、父権性社会のイデオロギーに影響を受けない自己創造の場としている。

結論として、ウルフにとっての「子供の不在」を心理学でいう「PTG」として位置づけ、彼女の小説を、精神変化、成長の過程の表象として解釈している。PTG理論を用いた本研究は、ウルフの小説の再読を可能にするだけでなく、既存の伝記研究への新たなアプローチを提案している。さらに補遺1として、ウルフの家系図・年表を、補遺2として、おもに第1章の議論を補う注釈付き参考文献一覧を付しており、本論の背景の入念な調査を裏付けるものである。

本論文については、口頭試問を平成25年6月22日に行った。審査担当者3名により申請論文の理論的枠組みや個別的内容に関して詳細な確認や質疑がなされた。まず、論文内で多用されるキーワード「PTG」の定義について従来の文学研究および精神医学におけるものとの相違について指摘があり、申請者は本論文で用いるPTG理論における「トラウマ」の説明を行った。また、本論におけるフロイトのトラウマ理論の応用について質問があり、申請者は『燈台へ』のエピソードを例示し、その理論による分析の可能性を説明した。一方で、現代の「トラウマ」の解釈としてトラウマを意識されたものや無意識されたものと捉える様々な定義が存在すること等が挙げられ、トラウマの概念の議論のさらなる可能性についても質問と提案があった。その後、論文の構成、参考文献、論文内の英語表現等について確認がなされた。いずれも補足的なものであり、博士論文としての価値を損なうものではなかった。

#### 審査結果

本申請論文は、文学研究における「PTG」の援用という点で新規性が認められ高く評価できる一方、心理学分野等においてさらなる知見が必要であるとの指摘も出された。しかしながら、それらは今後の研究課題としての氏への期待を示すものであり、本申請論文は学位を得るにすでに十分な水準に達していると、本審査委員会は判断した。したがって、申請論文の慎重な審査と口頭試問の結果に基づき、全員一致して金井彩香氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であると認定した。